

道徳教育こつこつ 教員200人学ぶ

福井で研究会

小中学校の教員が学校現場での道徳教育の在り方を考える研究会が22日、福井市の県産業会館であり、嶺北の教員約200人が授業の進め方やこつを学んだ。写真。

公益財団法人モラロジー研究所が全国各地で開いている。県内は嶺北、嶺南の2会場で、県モラロジー協議会が担当。文部科学省初等中等教育局の教科調査官、浅見哲也



さんら2人が講演した。小学校は2018年度から中学校では本年度から道徳が教科化され、授業の質の転換が求められている。浅見さんは

「道徳科は自己の生き方に考えを深める学習。子どもたちの内面的資質を育てる要になる」と強調。授業を進める上で、問題意識を持つことや、児童生徒が「自分事」として捉えられよう工夫が大切とした。

現状の課題を「登場人物に『共感』するだけの授業になり、国語か道徳か分かりにくい」と指摘。登場人物の思いや行動に共感した上で、児童生徒のこれまでの経験や考えを基にして、登場人物の立場に立てるように、問い掛けの意図や狙いをしっかりと設定するよう呼び掛けた。(栗原愛)